

# 統計の分析と利用

## 3. 母集団と標本



**堀田 敬介**

2012/11/30, Fri.~

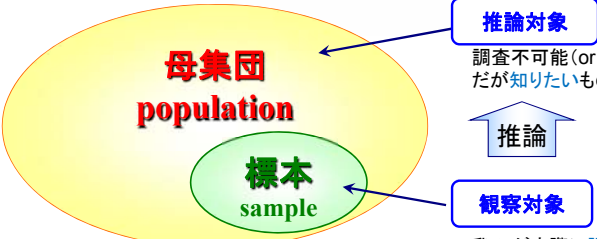
# Contents



- 母集団と標本
  - 母平均, 母分散の推測
    - 標本平均
      - 標本平均の従う確率分布
      - 大数の法則, 中心極限定理
      - 標準正規分布,  $t$ 分布
    - 標本分散
      - 標本分散の従う確率分布
      - $\chi^2$ 分布
  - 母比率の推測
    - 標本比率

# 母集団と標本：統計的推論

● 推測統計学 statistical estimate / statistical inference



**母集団 population**

**標本 sample**

**推論対象**

調査不可能 (or 困難) だが知りたいもの

↑ 推論 ↓


**観察対象**

我々が実際に調査可能なデータ

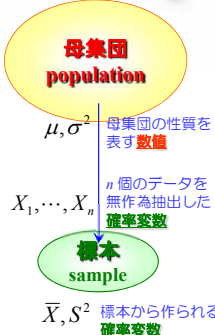
- 母集団が大きすぎて調査不可能な場合
  - 全国大学生の身長
- 全数調査 (悉皆調査) がそもそも不可能な場合
  - 品質検査
  - 料理の味良

注意: 今後特に断りのない限り, 無限母集団を考える.

# 母集団と標本：統計的推論



- 母集団の性質を表す数値
  - 母平均:  $\mu$
  - 母分散:  $\sigma^2$  (母標準偏差:  $\sigma$ )
- 母集団からの標本
  - データ  $n$  個を無作為抽出  $X_1, \dots, X_n$ 
    - 無作為抽出には乱数などを利用
  - $X_1, \dots, X_n$  は互いに独立な確率変数
    - 標本調査は随行: 無作為抽出により, 実際を取る値は偶然による
  - 各確率変数  $X_i$  は母集団と同じ分布に従う
  - $n$  はサンプルサイズ (抽出した標本数)
- 確率変数  $X_1, \dots, X_n$  から作られる確率変数
  - 標本平均:  $\bar{X} = \frac{X_1 + \dots + X_n}{n}$
  - 標本分散:  $S^2 = \frac{1}{n} \{ (X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2 \}$



**母集団 population**

$\mu, \sigma^2$  母集団の性質を表す数値

$X_1, \dots, X_n$   $n$  個のデータを無作為抽出した確率変数

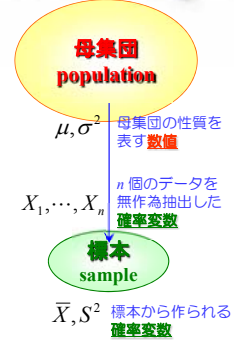
**標本 sample**

$\bar{X}, S^2$  標本から作られる確率変数

### 標本分布：標本平均

母集団から抽出した標本数  $n$  の標本  $X_1, \dots, X_n$  について、以下の確率変数を**標本平均**  $\bar{X}$  という

$$\bar{X} = \frac{X_1 + \dots + X_n}{n}$$

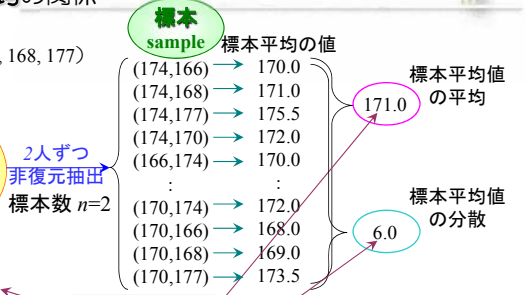


注意) 「標本平均」は確率変数 「標本平均値」が標本毎に実際に取る値

### 母集団と標本：標本平均

標本平均と母平均の関係

例：5人の身長  
 (170, 174, 166, 168, 177)



一致する！

母分散の  $\frac{1}{n}$  倍 (無限母集団)  
 母分散の  $\frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{1}{n}$  倍 (有限母集団)

$$E(\bar{X}) = \mu$$

$$V(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n}$$

$$\left( V(\bar{X}) = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{\sigma^2}{n} \right)$$



### 補足：標本平均の平均と母平均・標本平均の分散と母分散の関係 (証明)

$$E(\bar{X}) = E\left(\frac{X_1 + \dots + X_n}{n}\right) = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E(X_i) = \frac{1}{n} \cdot n\mu = \mu$$

$$V(\bar{X}) = E\{(\bar{X} - E(\bar{X}))^2\} = E\left\{\left(\frac{X_1 + \dots + X_n}{n} - E(\bar{X})\right)^2\right\}$$

$$= \frac{1}{n^2} E\{X_1 - E(X_1) + \dots + X_n - E(X_n)\}^2$$

$$= \frac{1}{n^2} E\left\{X_1 - E(X_1)\}^2 + \dots + \{X_n - E(X_n)\}^2 + 2 \sum_{i < j} (X_i - E(X_i))(X_j - E(X_j))\right\}$$

$$= \frac{1}{n^2} \left\{ \sum_{i=1}^n E(X_i - E(X_i))^2 + 2 \sum_{i < j} (X_i - E(X_i))(X_j - E(X_j)) \right\}$$

$$= \frac{1}{n^2} \left\{ \sum_{i=1}^n V(X_i) + 2 \sum_{i < j} Cov(X_i, X_j) \right\}$$

$$= \frac{1}{n^2} \left\{ n\sigma^2 - 2 \cdot \frac{n(n-1)}{2} \cdot \left(-\frac{1}{N-1}\sigma^2\right) \right\}$$

$$= \frac{1}{n} \cdot \frac{N-n}{N-1} \sigma^2$$

$$Cov(X_i, X_j) = \frac{E(X_i - E(X_i))(X_j - E(X_j))}{N(N-1)}$$

$$= \frac{1}{N(N-1)} \left\{ (x_i - \mu)(x_j - \mu) + \dots + \frac{1}{N-1} (x_i - \mu)(x_{i-1} - \mu) \right\}$$

$$= \frac{1}{N(N-1)} \left\{ (x_i - \mu) + \dots + (x_n - \mu) \right\}^2 - \left\{ (x_i - \mu)^2 + \dots + (x_n - \mu)^2 \right\}$$

$$= \frac{1}{N(N-1)} \left\{ \left(\frac{x_i + \dots + x_n}{N} - \mu\right)^2 - \left\{ (x_i - \mu)^2 + \dots + (x_n - \mu)^2 \right\} \right\}$$

$$= \frac{1}{N(N-1)} (0^2 - N\sigma^2) = -\frac{1}{N-1} \sigma^2$$

### 補足：有限母集団修正

母集団が有限の場合  
 標本平均の分散と母分散の関係は、

$$V(\bar{X}) = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{\sigma^2}{n}$$

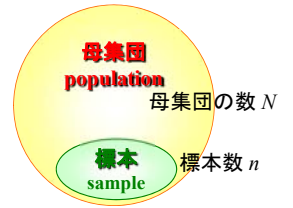
有限修正項

$N$ が余り大きくない場合や、 $n/N$ が大きい場合

標本数  $n$  に比べて母集団の数  $N$  が大きくないとき、有限修正項を考慮する。無限母集団 ( $N$  が十分大きい) の時は、有限修正項は1となるので無視して良い。

母集団が無限の場合  
 標本平均の分散と母分散の関係は、

$$V(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n}$$



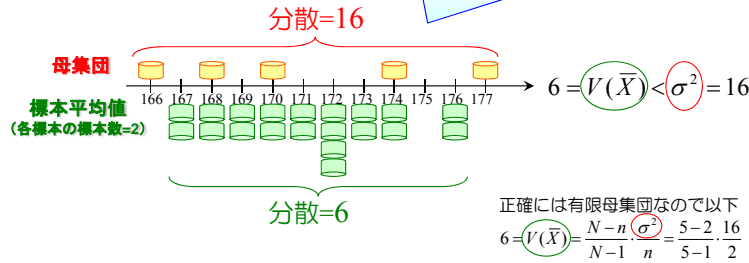
## 補足：母集団と標本：標本平均



なぜ「標本平均の分散」が「母分散」より小さくなるのか？  
〔即ち、なぜ  $V(\bar{X}) < \sigma^2$  なのか？〕

例：5人の身長  
(174, 166, 168, 177, 170)

「標本平均値の散らばり具合」の方が、  
「母集団の散らばり具合」より小さい！



## 母集団と標本：標本平均（まとめ）

標本平均

母集団から  $n$  個  
無作為抽出

$$\bar{X} = \frac{1}{n}(X_1 + \dots + X_n)$$

$X_1, \dots, X_n$  はそれぞれ確率変数  
それから作られる標本平均も  
確率変数

注意：「標本平均」と「標本平均値」は意味が違う

- 標本平均 ... 上で定義される確率変数
- 標本平均値 ... 確率変数「標本平均」が標本ごとに実際取る値

- 標本平均  $\bar{X}$  の期待値は母平均  $\mu$  に等しい  $E(\bar{X}) = \mu$
- 標本平均  $\bar{X}$  の分散は母分散  $\sigma^2$  の  $1/n$  に等しい  $V(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n}$

有限母集団の場合：  $V(\bar{X}) = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{\sigma^2}{n}$

## 演習1：標本平均



- 世界に4匹しかいない貴重な昆虫がいる。その集団を母集団としよう。
  - 神様はこの4匹の全長を全て知っており、それぞれ (2, 6, 7, 5) である。
  - 神様は母平均の値を求めた。いくつかな？  $\mu = ?$
  - 神様は母分散の値を求めた。いくつかな？  $\sigma^2 = ?$
- 探検家は2匹捕まえる。それが標本となる。
  - 各探検家は重複なく2匹を捕まえた。  
(つまり、非復元抽出で2匹捕らえ、全長測定後放す)
  - 各探検家は自分が捕まえた2匹の標本の平均値を求めた。
  - それぞれ、いくつかな？ 全ての組合せについて計算せよ。  $\bar{X} = ?$
- 1と2の結果から、 $E(\bar{X}) = \mu$  と  $V(\bar{X}) = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{\sigma^2}{n}$  が成立していることを確認しよう。  
ただし、 $N$ は母集団の大きさ、 $n$ は標本の大きさである。

## 母集団と標本：大数の法則



- 「標本平均  $\bar{X}$  の期待値は母平均  $\mu$  に等しい」  $E(\bar{X}) = \mu$
- 「標本平均  $\bar{X}$  の分散は母分散  $\sigma^2$  の  $1/n$  に等しい」  $V(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n}$

有限母集団の場合  $\frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{1}{n}$  倍

### 大数の法則

標本数  $n$  が大きくなるにつれて、標本平均

$$\bar{X} = \frac{1}{n}(X_1 + \dots + X_n)$$

が母平均  $\mu$  に近い値をとる確率は 1 に近づく。

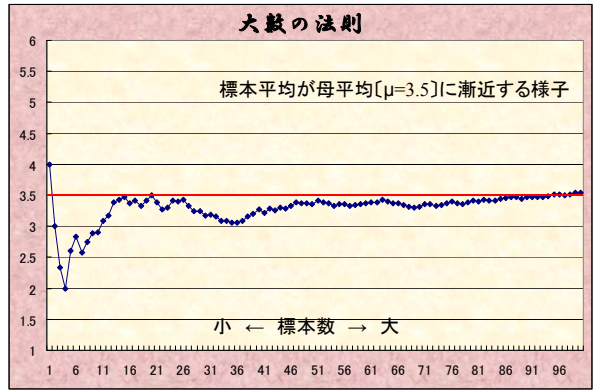


標本数  $n$  が十分大きければ、標本は母集団  
を正しく表すと考えてもよいでしょう。

### 母集団と標本：大数の法則

#### 大数の法則

例：サイコロを振って出た目の平均  $[\mu=3.5]$



### 補足：大数の法則

#### 大数の法則

$$P(|\bar{X} - \mu| < \varepsilon) \rightarrow 1 \quad (n \rightarrow \infty)$$

証明はチェビシェフの不等式  $P(|\bar{X} - \mu| > k\sigma) \leq 1/k^2$  から

$\because X_1, \dots, X_n$  は独立で、同じ分布に従う  
 $\rightarrow E(X_i) = \mu, V(X_i) = \sigma^2 (i=1, \dots, n)$   
 $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$  とすると  $E(\bar{X}) = \mu, V(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n}$   
 ここで、チェビシェフの不等式から、 $k\sigma = \varepsilon$  とおくと ( $\sigma^2 = \sigma^2/n$ )  
 $P(|\bar{X} - \mu| > \varepsilon) \leq \sigma^2 / n\varepsilon^2 \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$  ■

### 標本分布

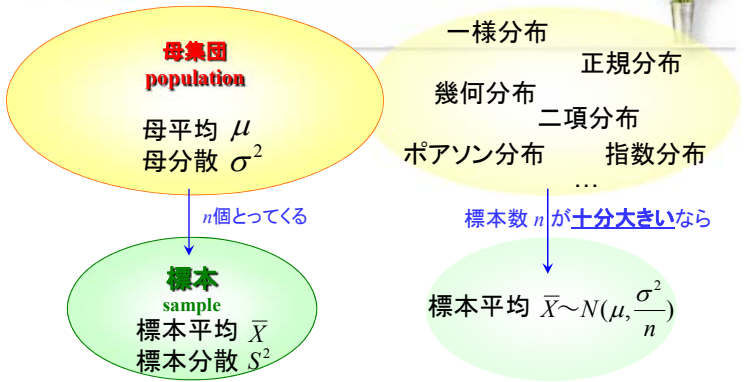
標本平均  $\bar{X}$  が従う確率分布

#### 中心極限定理

$X_1, \dots, X_n$   
 母平均  $\mu$ 、母分散  $\sigma^2$  の母集団から大きさ  $n$  の標本を無作為に抽出した時、 $n$  が十分大きければ、母集団の従う確率分布に関係なく、標本平均  $\bar{X}$  は平均  $\mu$ 、分散  $\sigma^2/n$  の正規分布  $N(\mu, \sigma^2/n)$  に従うとみなすことができる

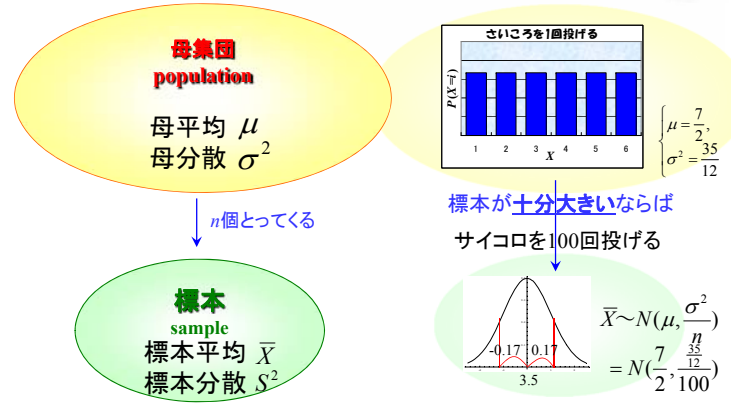
$$\begin{cases} X_1 + \dots + X_n \sim N(n\mu, n\sigma^2) \\ \bar{X} = \frac{1}{n}(X_1 + \dots + X_n) \sim N(\mu, \frac{\sigma^2}{n}) \end{cases}$$

### 中心極限定理



中心極限定理は、母集団分布がなんであっても(正規分布でなくても)、標本数  $n$  が十分大きければ、標本平均  $\bar{X}$  は、近似的に正規分布に従う、と述べている

# 中心極限定理



# 補足：中心極限定理

**中心極限定理**

$n \rightarrow \infty$  のとき,  

$$P\left(a \leq (X_1 + \dots + X_n - n\mu) / \sqrt{n}\sigma \leq b\right) \rightarrow \int_a^b \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{x^2}{2}} dx$$
 が成り立つ。言い換えると,  

$$P\left(a \leq \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma / \sqrt{n}} \leq b\right) \approx \Phi(b) - \Phi(a)$$
 としてよいということ。  
 (右辺の  $\Phi$  は標準正規分布の累積分布関数)

# 標本分布：標本平均の標準化

平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2/n$  の標本平均  $\bar{X}$  (確率変数) の標準化

$$Z = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma / \sqrt{n}}$$

標準化が2つの世界の架け橋

標本平均  $\bar{X}$  が、正規分布  $N(\mu, \sigma^2/n)$  に従うとき、標準化確率変数  $Z$  は、標準正規分布  $N(0, 1)$  に従う

標本から母平均  $\mu$  を推定「Z推定」・「Z検定」に利用する

# 中心極限定理の利用

平均20,000回で、400回は±2%の誤差！ありふれたことだろう...

例題1：表裏が等確率で出るコインを40,000回投げる。表が19,600回~20,400回出る確率は？

- $i$  回目： $X_i=1,0$  (1:表, 0:裏)
- 表の出る回数： $X=X_1+X_2+\dots+X_n$  (二項分布  $Bi(40000, 1/2)$  に従う)

$$f(x) = {}_n C_x p^x (1-p)^{n-x} \quad (x=0,1,\dots,n)$$

$$E(X) = np, V(X) = np(1-p)$$

つまり  $P(X > 20400) + P(X < 19600)$  はいくつか？

$$1 - \sum_{x=19600}^{20400} {}_{40000} C_x (1/2)^x (1/2)^{40000-x}$$

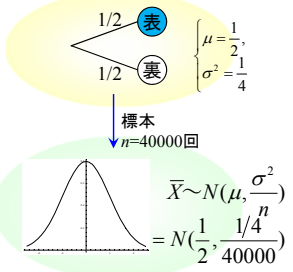
を計算すればよい！

ところが  ${}_{40000} C_x$  を計算するのは困難！  
 例えば、Excel2003で  ${}_{40000} C_{19600}$  を計算すると、...

#NUM! =COMBIN(40000,19600) 計算不能！

### 中心極限定理の利用

- 中心極限定理  $\rightarrow \bar{X} \sim N(\mu, \frac{\sigma^2}{n})$
- 標準化  $\rightarrow Z := \frac{X - \mu}{\sigma} \sim N(0,1) \rightarrow Z := \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0,1)$
- $X_i \sim Bi(1, 1/2) \rightarrow \begin{cases} \mu = E(X_i) = n_i p_i = 1 \times 1/2 = 1/2, \\ \sigma^2 = V(X_i) = n_i p_i (1 - p_i) = 1 \times 1/2 \times 1/2 = 1/4 \end{cases}$



表が19600~20400回出る確率を求めたいので、

$$P(19600 \leq X_1 + \dots + X_n \leq 20400)$$

$$= P\left(\frac{19600}{n} \leq \frac{X_1 + \dots + X_n}{n} \leq \frac{20400}{n}\right)$$

$$= P\left(\frac{19600 - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \leq \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \leq \frac{20400 - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right)$$

$$= P\left(\frac{\frac{19600}{40000} - \frac{1}{2}}{\sqrt{\frac{1}{4}/40000}} \leq Z \leq \frac{\frac{20400}{40000} - \frac{1}{2}}{\sqrt{\frac{1}{4}/40000}}\right)$$

$$= P(-4 \leq Z \leq 4)$$

$$= 0.99993\dots$$

### 中心極限定理の利用

例題2： 昨シーズン打率3割の打者が、今シーズン300回打席にたった。今シーズンの打率が4割以上となる確率は？

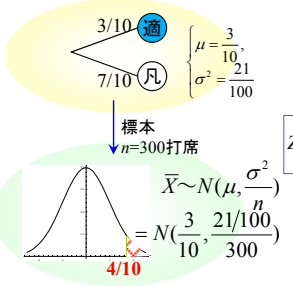
- i回目： $X_i = 1, 0$  (1: ヒット, 0: 凡打)
- ヒット数： $X = X_1 + X_2 + \dots + X_n$
- 二項分布  $Bi(300, 3/10)$  に従う  
 $f(x) = C_n^x p^x (1-p)^{n-x}$  ( $x = 0, 1, \dots, n$ )  
 $E(X) = np, V(X) = np(1-p)$

つまり  $P(X \geq 120)$  はいくつか?

$\sum_{x=120}^{300} C_x^{300} (3/10)^x (7/10)^{300-x}$  を計算すればよい!

### 中心極限定理の利用

- 中心極限定理  $\rightarrow \bar{X} \sim N(\mu, \frac{\sigma^2}{n})$
- 標準化  $\rightarrow Z := \frac{X - \mu}{\sigma} \sim N(0,1) \rightarrow Z := \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0,1)$
- $X_i \sim Bi(1, 3/10) \rightarrow \begin{cases} \mu = E(X_i) = n_i p_i = 1 \times 3/10 = 3/10, \\ \sigma^2 = V(X_i) = n_i p_i (1 - p_i) = 1 \times 3/10 \times 7/10 = 21/100 \end{cases}$



打率4割以上の確率を求めたいので、

$$P(\bar{X} \geq 4/10)$$

$$= P\left(\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \geq \frac{4/10 - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right)$$

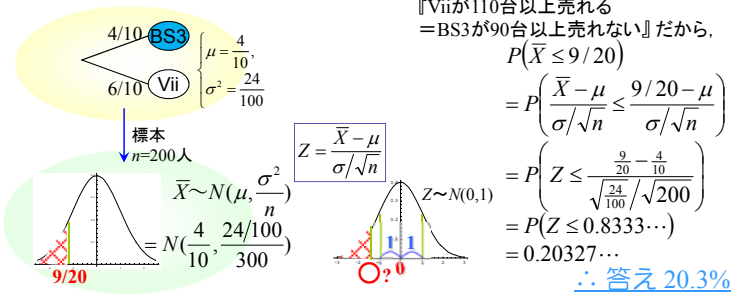
$$= P\left(Z \geq \frac{\frac{4}{10} - \frac{3}{10}}{\sqrt{\frac{21}{100}/300}}\right)$$

$$= P(Z \geq 3.7796\dots)$$

$$= 0.00007853\dots$$

### 中心極限定理の利用

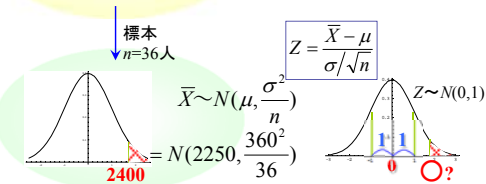
例題3： 2種類のゲーム機、ソニーのBlainStation3と任天堂のViiの市場シェアはBS3が40%、Viiが60%である。ある店で、どちらかを買いに来た200人の客がいるとき、Viiが110台以上売れる確率は？ (ただし、両方買う客はないとする)



### 例題： 出展 技術評論社「確率・統計の仕組みがわかる本」例7.2

【問題】小学生の1ヶ月の小遣いが、平均2250円、標準偏差360円です。このとき、ランダムに選んだ36人の小学生の小遣い平均が2400円を超える確率は？

**母集団**  
母平均  $\mu=2250$ 円  
母分散  $\sigma^2=360^2$

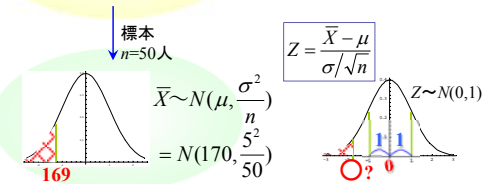


$$\begin{aligned}
 &P(\bar{X} > 2400) \\
 &= P(\bar{X} - \mu > 2400 - \mu) \\
 &= P\left(\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} > \frac{2400 - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right) \\
 &= P\left(z > \frac{2400 - 2250}{360/\sqrt{36}}\right) \\
 &= P(z > -2.50) \\
 &\cong 0.0062097 \\
 &\therefore \text{答え } 0.62\%
 \end{aligned}$$

### 例題：

【問題】全国男子大学生の身長が、平均170cm、標準偏差5cmとします。このとき、ランダムに選んだ50人の大学生の平均身長が169cmを下回る確率は？

**母集団**  
母平均  $\mu=170$ cm  
母分散  $\sigma^2=5^2$



$$\begin{aligned}
 &P(\bar{X} < 169) \\
 &= P(\bar{X} - \mu < 169 - \mu) \\
 &= P\left(\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} < \frac{169 - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right) \\
 &= P\left(z < \frac{169 - 170}{5/\sqrt{50}}\right) \\
 &= P(z < -1.4142) \\
 &\cong 0.079270 \\
 &\therefore \text{答え } 7\%
 \end{aligned}$$

### Coffee Break!

#### 100<sup>10</sup>と10<sup>100</sup>はどちらが大きい?

- どちらが大きい?
  - 100<sup>10</sup> = ? 100<sup>10</sup> = 100,000,000,000,000,000,000,000,000 (0が20個)
  - 10<sup>100</sup> = ? 10<sup>100</sup> = 100,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000 (0が100個)

- どちらが大きい?
  - 10<sup>100</sup> = ? 10<sup>100</sup> = 100,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000 (0が100個)
  - 100! = ? 100! ≈ 900,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000 (0が157個)

累乗の増え方は  
凄いね  
階乗の増え方は  
もっと凄いね!

#### スターリングの公式

$$N! \approx (N/e)^N \sqrt{2\pi N}$$

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \frac{N!}{(N/e)^N \sqrt{2\pi N}} = 1$$

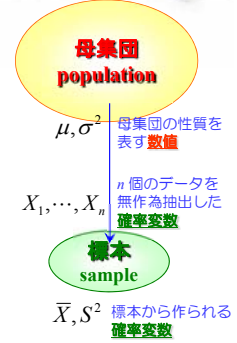
充分大きなNについて、Nの階乗の近似値を与える



### 標本分布：標本分散

母集団から抽出した標本数  $n$  の標本  $X_1, \dots, X_n$  について、以下の確率変数を**標本分散**  $S^2$  という

$$S^2 = \frac{1}{n} \{(X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2\}$$



注意) 「標本分散値」は確率変数「標本分散」が標本毎に実際に取る値

### 母集団と標本：標本分散値の平均

●母分散と標本分散の関係  
 ●例：5人の身長

**母集団**  
population

170 174 177  
166 168

母集団数  $N=5$   
母平均  $\mu=171.0$   
母分散  $\sigma^2=16.0$

2人ずつ  
非復元抽出  
標本数  $n=2$

**標本**  
sample

標本分散値

|           |   |      |
|-----------|---|------|
| (174,166) | → | 16.0 |
| (174,168) | → | 9.0  |
| (174,177) | → | 2.3  |
| (174,170) | → | 4.0  |
| (166,174) | → | 16.0 |
| :         | : | :    |
| (170,174) | → | 4.0  |
| (170,166) | → | 4.0  |
| (170,168) | → | 1.0  |
| (170,177) | → | 12.3 |

標本分散値の平均

10.0

母分散の  $\frac{n-1}{n}$  倍 (無限母集団)  
 母分散の  $\frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n}$  倍 (有限母集団)

$E(S^2) = \frac{n-1}{n} \sigma^2$   
 $E(S^2) = \frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n} \sigma^2$

Excel

### 補足：標本分散の平均と母分散の関係 (証明)

$$\begin{aligned}
 E(S^2) &= E\left\{\frac{1}{n}\{(X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2\}\right\} \\
 &= \frac{1}{n} E\left\{\{(X_1 - \mu) - (\bar{X} - \mu)\}^2 + \dots + \{(X_n - \mu) - (\bar{X} - \mu)\}^2\}\right\} \\
 &= \frac{1}{n} E\left\{\sum_{i=1}^n \{(X_i - \mu)^2 - 2(X_i - \mu)(\bar{X} - \mu) + (\bar{X} - \mu)^2\}\right\} \\
 &= \frac{1}{n} \left\{ \sum_{i=1}^n E(X_i - \mu)^2 - 2E\left(\sum_{i=1}^n (X_i - \mu)(\bar{X} - \mu)\right) + \sum_{i=1}^n E(\bar{X} - \mu)^2 \right\} \\
 &= \frac{1}{n} \left\{ \sum_{i=1}^n V(X_i) - 2E\left(n \frac{X_1 + \dots + X_n}{n} - \mu\right)(\bar{X} - \mu) + nE(\bar{X} - \mu)^2 \right\} \\
 &= \frac{1}{n} (n\sigma^2 - 2nE(\bar{X} - \mu)^2 + nE(\bar{X} - \mu)^2) \\
 &= \sigma^2 - V(\bar{X}) \\
 &= \sigma^2 - \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{1}{n} \sigma^2 \\
 &= \frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n} \sigma^2
 \end{aligned}$$

### 補足：有限母集団修正

●母集団が有限の場合  
 ●標本分散の平均と母分散の関係は、

$$E(S^2) = \frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n} \sigma^2$$

有限修正項

母集団の要素数  $N$  が大きくないとき、有限修正項を考慮。  
 無限母集団 ( $N$  が十分大きい) 時は、有限修正項は 1 となるので無視。

●母集団が無限の場合  
 ●標本分散の平均と母分散の関係は、

$$E(S^2) = \frac{n-1}{n} \sigma^2$$

### 母集団と標本：標本分散 (まとめ)

●標本分散  $S^2$

母集団から  $n$  個  
無作為抽出

$$S^2 = \frac{1}{n} \{(X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2\}$$

- $X_1, \dots, X_n$  はそれぞれ確率変数
- それから作られる標本平均も確率変数
- よって、それから作られる標本分散も確率変数

●注意：「標本平均の分散  $V(\bar{X})$ 」と「標本分散の平均  $E(S^2)$ 」を混同しないこと！

「標本分散値の平均」と「母分散」の関係

$$E(S^2) = \frac{n-1}{n} \sigma^2$$

有限母集団の場合：  
 $E(S^2) = \frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n} \sigma^2$



### 演習2：標本分散



- 世界に4匹しかいない貴重な昆虫がいる。その集団を母集団としよう。
  - 神様はこの4匹の全長を全て知っており、それぞれ(2, 6, 7, 5)である。
  - 神様は母分散の値を求めた。いくつか?  $\sigma^2 = ?$
- 探検家は2匹捕まえる。それが標本となる。
  - 各探検家は重複なく2匹を捕まえた。(つまり、非復元抽出で2匹捕らえ、全長測定後放す)
  - 各探検家は自分が捕まえた2匹の標本の分散の値を求めた。
  - それぞれ、いくつか? 全ての組合せについて計算せよ。  $S^2 = ?$
- 1と2の結果から、 $E(S^2) = \frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n} \sigma^2$  が成立することを確認しよう。  
ただし、Nは母集団の大きさ、nは標本の大きさである。

### 標本分布：標本分散と不偏分散



●標本分散  $S^2$

$$S^2 = \frac{1}{n} \{ (X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2 \}$$

●不偏分散  $s^2$  ← この標本分散は、母分散 $\sigma^2$ の不偏推定量

$$s^2 = \frac{1}{n-1} \{ (X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2 \}$$

$E(S^2) = \frac{n-1}{n} \sigma^2 \quad E(s^2) = \sigma^2$

有限母集団の場合：  
 $E(S^2) = \frac{N}{N-1} \cdot \frac{n-1}{n} \sigma^2 \quad E(s^2) = \frac{N}{N-1} \sigma^2$

Nが充分大きいならば、 $N/(N-1)$ は1と考えて良い。

### 標本分布：標本分散の従う確率分布



●標本分散  $S^2$  はどんな確率分布に従うのか?

$$S^2 = \frac{1}{n} \{ (X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2 \}$$

$$\rightarrow \frac{n}{\sigma^2} \cdot S^2 = \frac{n}{\sigma^2} \cdot \frac{1}{n} \{ (X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2 \}$$

$$= \left( \frac{X_1 - \bar{X}}{\sigma} \right)^2 + \dots + \left( \frac{X_n - \bar{X}}{\sigma} \right)^2$$

● $\chi^2$ 分布に従う ← n個の  $N(0,1)$  に従う確率変数の二乗和

$\sum (X_i - \bar{X}) = 0$  という制限のため、自由に動ける変数の個数は  $n-1$  となる。

●母集団が正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  に従うとみなせる時、確率変数  $\frac{nS^2}{\sigma^2}$  は自由度  $n-1$  の  $\chi^2(n-1)$  分布に従う。

### 標本分布：標本分散の従う確率分布



●標本分散  $S^2$  はどんな確率分布に従うのか?

$$\chi^2 = \frac{nS^2}{\sigma^2} \sim \chi^2(n-1)$$

$$S^2 = \frac{1}{n} \{ (X_1 - \bar{X})^2 + \dots + (X_n - \bar{X})^2 \}$$

母集団  
母平均  $\mu$   
母分散  $\sigma^2$

↓ 標本  $n$

標本  
標本平均  $\bar{X}$   
標本分散  $S^2$

$\chi^2 = \frac{nS^2}{\sigma^2} \sim \chi^2(n-1)$

### χ<sup>2</sup>分布とは？

標準正規分布  $N(0,1)$  に従う、互いに独立な  $n$  個の確率変数  $Z_1, \dots, Z_n$  を考える

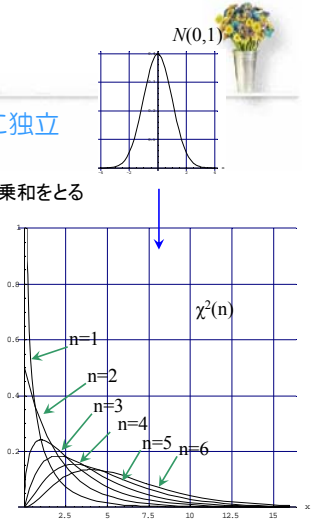
$$\chi^2 = Z_1^2 + \dots + Z_n^2 \quad \leftarrow \text{二乗和をとる}$$

新たな確率変数

この確率変数  $\chi^2$  は、自由度  $n$  の  $\chi^2$  分布に従う！

互いに自由に値をとることが出来る確率変数の個数

標本から母分散  $\sigma^2$  を推定  
「カイ二乗推定」「カイ二乗検定」



### 標本分布：標本分散

例題：道ばたの雑草の背丈の平均  $\mu=50\text{cm}$ , 分散  $\sigma^2=25$  だとして、標本として10本の雑草を抜いて調べたとき、その分散が50を超える確率は？

母集団  
母平均  $\mu=50\text{cm}$   
母分散  $\sigma^2=25$

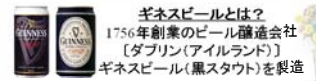
標本  $n=10$  本

標本平均  $\bar{X}$   
標本分散  $S^2$



$$\begin{aligned}
 P(S^2 > 50) &= P\left(\frac{\chi^2 \sigma^2}{n} > 50\right) \left[ \because \chi^2 = \frac{nS^2}{\sigma^2} \right] \\
 &= P\left(\chi^2 > 50 \frac{n}{\sigma^2}\right) \\
 &= P\left(\chi^2 > 50 \frac{10}{25} = 20\right) \in (0.025, 0.010) \\
 &= 0.017912 \quad \left( \text{自由度 } 9 \text{ の } \chi^2 \text{ 分布表から} \right. \\
 &\quad \left. P(\chi^2(9) > 19.0228) = 0.025 \right. \\
 &\quad \left. P(\chi^2(9) > 21.6660) = 0.010 \right) \\
 &= 0.017912 \quad (\text{Excel関数 CHIDISTより})
 \end{aligned}$$

### t分布とは？



2個の互いに独立な確率変数  $X, Y$  を考える。

- $X$  : 標準正規分布  $N(0,1)$  に従う
- $Y$  : 自由度  $n$  の  $\chi^2$  分布  $\chi^2(n)$  に従う

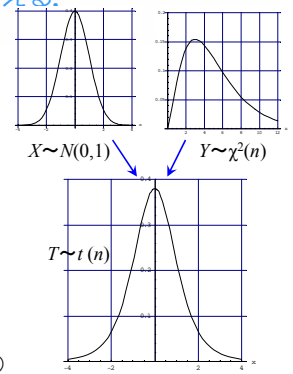
$$T := \frac{X}{\sqrt{Y/n}}$$

新たな確率変数

確率変数  $T$  は、自由度  $n$  の  $t$  分布に従う！

Student の  $t$  分布  
ゴセット (1876-1937)

ビール会社ギネスGuinnessでビールの品質管理  
標本が小さいとき、分散の値が(正規分布では上手くいかない...)  
→  $t$  分布の発見 ("Student" [W.S.Gossett] "The probable error of a mean", Biometrika vol.6, 1908)



### 標本分布：標本平均と標本分散

標本平均  $\bar{X}$  の標準化

$$\bar{X} \rightarrow Z = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma / \sqrt{n}}$$

標準正規分布  $N(0,1)$  に従う

標本分散  $S^2$  に  $n/\sigma^2$  を掛けた確率変数

$nS^2/\sigma^2$   
自由度  $n-1$  の  $\chi^2$  分布に従う

$$T = \left( \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma / \sqrt{n}} \right) \cdot \frac{1}{\sqrt{\frac{1}{n-1} \cdot \frac{nS^2}{\sigma^2}}} = \frac{\bar{X} - \mu}{S / \sqrt{n-1}}$$

自由度  $n-1$  の  $t$  分布に従う

標本から母平均  $\mu$  を推定  
「 $t$  推定」「 $t$  検定」

### 標本分布：確率変数 $T$ の従う分布

確率変数  $T$  は、自由度  $n-1$  の  $t$  分布に従う

$$T = \frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n-1}} \sim t(n-1)$$



$$Z = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0,1)$$

$$T = \frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n-1}} \sim t(n-1)$$

### 補足：必要な標本の大きさ

標本平均の実現値を母平均の推定値とする場合

$$|\bar{X} - \mu| \leq \varepsilon \quad (\bar{X} \sim N(\mu, \sigma^2/n))$$

今、標本平均の従う正規分布から考えて

$\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0,1) \Rightarrow P(-1.96 \leq \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \leq 1.96) = 0.95$   
 $\Leftrightarrow P(-1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}} \leq \bar{X} - \mu \leq 1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}) = 0.95$   
 $\Leftrightarrow P(|\bar{X} - \mu| \leq 1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}) = 0.95$

参考：  
有限母集団の場合  
 $n \geq \frac{1}{\frac{\varepsilon^2}{4\sigma^2} \left(1 - \frac{1}{N}\right) + \frac{1}{N}}$   
 $\left(S^2 = \frac{N-n}{N-1} \frac{\sigma^2}{n}\right)$

従って、許容誤差を  $\varepsilon$  としたとき

$$\Rightarrow 1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}} \leq \varepsilon$$

$$\Leftrightarrow n \geq \frac{(1.96\sigma)^2}{\varepsilon^2}$$

定められた許容誤差  $\varepsilon > 0$  に対し、母集団の大きさ  $N$  と母標準偏差  $\sigma$  が既知の場合、単純無作為抽出の大きさ  $n$  を、左不等式を満たすようにとれば、95%以上の確率で、誤差を許容誤差より小さくできる。

### 補足：必要な標本の大きさ

例題：大きさ6000万の母集団の母比率  $p$  を、95%の確率で誤差が0.05以下になるようにしたい。必要な単純無作為抽出の大きさ  $n$  はいくらか？  $|\bar{X} - \mu| \leq 0.05$

$N$  が十分大きいので、

$$n \geq \frac{(1.96)^2 \sigma^2}{\varepsilon^2} \geq \frac{(1.96)^2}{4\varepsilon^2} = \frac{(1.96)^2}{4(0.05)^2} \approx 384.16$$

$$\left(\sigma^2 = p(1-p) = -\left(p - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{4} \leq \frac{1}{4}\right)$$

$\sigma^2$  の最大値は  
0.25 ( $p=0.5$  の時)

### 参考文献

- 東京大学教養学部統計学教室編「統計学入門」東京大学出版会（1991）
- 村上雅人「なるほど統計学」海鳴社（2002）
- 田栗正章他「やさしい統計入門」講談社（2007）
- 鈴木達三・高橋宏一「標本抽出の計画と方法」放送大学（1991）
- 永田靖「サンプルサイズの決め方」朝倉書店（2003）
- 高橋信[著]・トレンドプロ「マンガでわかる統計学」オーム社（2004）
- 丹慶勝市「図解雑学 統計解析」ナツメ社（2003）
- 白石修二「例題で学ぶ Excel 統計入門」森北出版（2001）
- 東京大学教養学部統計学教室編「自然科学の統計学」東京大学出版会（1992）